

日本に於ける朱丹溪學說の 受容について

安井 広 迪

はじめに

朱丹溪（一二八一—一三五八）は金元四大家のひとりとしてその名を知られるが、時代的に他の三人より遅れて出現している為、それまでの諸説を総合する立場にあり、また「陽有余陰不足説」を唱えて養陰派と呼ばれ、その医説はその後の医学界に大きな影響を与えた。

16世紀の日本の医学は、金元医学の導入によってその面目を一新した。この時に主として取り入れられた体系が李東垣と朱丹溪のものであった為、李朱医学という名称が定着した。しかしながら、この二人の医学体系は異なった基盤の上に立っており、単に李朱医学と呼ぶのは妥当ではないと考える。

日本に始めて系統的に金元医学を導入した田代三喜（一

四六五—一五四三）は一四九八年に明より帰朝しており、したがって16—17世紀に出現してきた新しい動き（李東垣から発生し、丹溪學說に対立する）を知らなかった。その弟子の曲直瀬道三（二五〇七—一五九四）の生きた時代は、薛己や趙獻可、張景岳と重複するが、その医学体系は虞搏など朱丹溪の影響を強く受けた人のものを受け継いでおり、日本における丹溪學派の一人と目される。そこで今回は彼の代表的著書『啓迪集』が、どの程度朱丹溪の影響を受けているかを、主としてその引用文献から探ってみた。

丹溪學派の系譜

金元医学の発端をなすものは成無己の『註解傷寒論』（一一四四）と考えられ、その後彼の方法論の延長線上に多くの新理論が出現した。最初に現われたのは劉完素（一一〇一—一二〇〇）で、火熱による疾病を重視し、治療に寒涼薬を用いることが多かったので寒涼派と呼ばれる。この劉完素の弟子に荊山の浮屠があり、その弟子が羅知悌である。朱丹溪はこの羅知悌に学んだ。即ち彼は劉完素から数えて三代目の弟子に当る。

朱丹溪は江南の産である。南方には湿熱の病が多く、北

方の劉完素が行ったように辛燥の劑を用いて火熱を瀉すると、たやすく陰を損い火旺の状態となることを見抜いた彼は、「陽有余陰不足論」を唱え、陰を滋し、虛火を降す処方をも多く用いた。養陰派と呼ばれる所以である。

朱丹溪には戴思恭（『証治要訣』の著者）、王履（『医經〇淵集』の著者）など直接の弟子のほか、孫弟子の劉純（『玉機微義』の著者）や、思想的に強く影響を受けた王綸（『明医雜著』の著者）や虞搏（『医学正伝』の著者）などの彼の学说を継ぐ多くの後継者があつた。そしてこの流派は、李東垣の補土派から發生して薛己や張景岳に至る一派と並んで明代初期〜中期の二大流派を形成した。

『啓迪集』における丹溪学派の影響

『啓迪集』は凡そ六四種の文献を参考にして編纂されたとされている。これらの文献のうち、朱丹溪の影響下にあるものがどのくらいあるかを探り、若干の内容の検討を行った。『啓迪集』に名前を載せられた各文献の引用回数の上位十傑は次の通りである。

- 1、医学正伝（虞搏）
- 2、玉機微義（劉純）

四三四

三九〇

- 3、医林集要（王璽） 二六二
- 4、丹溪心法（朱丹溪） 一八五
- 5、惠濟方（王永輔） 一六八
- 6、医方撰要（周文采） 六三
- 7、婦人大全良方（陳自明） 六一
- 8、諸証弁疑（吳球） 三〇
- 9、傷寒活人指掌圖（吳恕） 二九
- 10、明医雜著（王綸） 二九

最も引用回数が多い『医学正伝』（二五二五）は、各病門ごとに『内經』によって論を立て、次いで脈法に触れ、方法（治療原則）を述べている。方法の冒頭には常に「丹溪曰く」とあり、著者の虞搏がいかに丹溪に私淑していたかが伺われる。もちろん収載処方も丹溪の創方に限らず、『傷寒論』を始めとし、『和劑局方』や他の金元四大家のものなど、広い視野で選ばれてはいるが、その根底には常に丹溪の思想が流れている。同じ傾向は、劉純や王綸その他の著書にも見受けられ、『啓迪集』は丹溪学派の説を濃厚に取り入れているといえることができる。但し、婦人門では陳自明の『婦人大全良方』が、また傷寒門では『傷寒活人

指掌図』や『傷寒百問』が多く引用されている。これらは必ずしも丹溪学説とは関係がないが、その部門の特殊性により参考に供されたものであろう。

全体を通して『啓迪集』は、引用書目から見ても、内容から見ても、朱丹溪の影響が非常に強いが、朱丹溪の考え方そのものではなく、丹溪没後に発展した学説を、道三の考えで取捨選択してまとめられたものである。なお、少数ながら東垣学派の影響も認められる。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)

中国伝統医学修得学生の

漢語素養について (その2)

小杉 順一

私達日本人は、昔から中国文化の影響を深く受けてきたが、明治期、社会状況の変化により全般的に欧米文化志向となった。しかし道徳規範としての中国思想は教育に取り入れられ、より多くの人々がこの影響を受けてきた。戦後は、思想・実践の両面において、中国文化はその存在の基盤を失い、現在に至っている。

このような現状で、中国伝統医学を修得しようとする学生がどの程度の素養を有しているかについて、第一学年を対象としてアンケート調査をし、前回発表の機会を得た。

その結果は、知識はある程度持つてはいるが、年齢による差が歴然と表われており、楽観を許さないものであり、また「気」についても独善の理解が目立った。

今回、最高学年たる三年生が専門的教育課程を終了する